

カバーする我が国の静止気象衛星「ひまわり」、また地球規模でより高分解能、多種類の情報を提供する極軌道衛星 NOAA の観測データは、台風研究部における研究にとって重要な素材となっている。さらにメソスケール現象等の観測に威力を発揮するレーダについても、近年は風の観測も可能なドップラーレーダが貴重な情報を提供するようになった。台風研究部では昭和62年に独自で沖縄での研究観測を行い、63年には「集中豪雨のメカニズムと予測に関する研究」(文部省科研費)に参加して、九州において共同観測を実施している。

台風研究部においては、上に述べたような衛星資料や高層観測資料を用いて、気候変動に関連するような積雲対流活動の長周期変動の解析をも進めている。最近では1986年から87年にかけて発生したエルニーニョ現象に関する緊急研究(科学技術庁振興調整費)に参加し、「ひまわり」の衛星資料を用いて、同時期に活発な積雲対流活動の領域が周期約1カ月の季節内変動を示しながら西太平洋上を東進していくこと、この東進する大規模な積雲対流域の中に、更によりスケールの小さな積雲対流群が存在し、大小のスケールにまたがる階層的な構造として組織化されていることを明らかにした。さらに極軌道衛星 NOAA による波長別放射観測資料を用いて、海面水温および巻雲タイプ、積雲タイプそれぞれの雲の分布を判別するアルゴリズムを開発し、現在この手法を用いて熱帯を含むより広い範囲での各種タイプの雲の分布およびその変動の特徴を解明する研究を行っている。

現在進行中のプロジェクトとしては「静止気象衛星等の資料による大気・海洋変動と気候変動の解析研究」がある。これは我が国における WCRP 関連プロジェクト「太平洋における大気・海洋の変動と気候変動に関する国際共同研究」(科学技術庁振興調整費)の一環をなす

もので、熱帯を中心とする太平洋全域およびその周辺領域を対象として、静止気象衛星および軌道衛星の観測資料を組織的に収集・編集し、これを統一的に解析して大規模な雲域変動を太平洋規模で明らかにしようとするものである。この研究においては、「ひまわり」の観測資料が極めて重要な地位を占めている。台風研究部では気象衛星センターと共同して1980年から89年までの10年分の観測資料のデータベースを赤外基本ヒストグラム資料を中心に作成中である。また平成元年度からは、新たなプロジェクトである「アジアモンスーン機構に関する研究」(科学技術庁促進費)がスタートし、台風研究部は気象研究所における取りまとめ部局となった。このように現在の台風研究部は台風を念頭に置きつつも、積雲対流スケールから地球規模までの幅広い熱帯気象を研究する部門として活動しようとしている。

さて、この記事の依頼事項の一つである「研究機関に入るにはどうしたらよいか」ということだが、これには気象庁全体としての人事の方針が大きなウエイトを持ってくる。何も台風研究部に限らず、気象庁外部の若い人が直接気象研究所に就職することは、最近あまり聞かない。例がないわけではないのだが、そのためには“人事上のタイミングが良い”+“研究部に「ぜひ欲しい」と言わせるぐらい有能である”という条件が必要なようだ。既に気象庁に在籍している人にとっては、前者の条件で十分だろう。そのためもあってか、台風研究部のスタッフも「アタマばかり」から「カラダばかり」まで、なかなかバラエティに富んでいる。この各々の立場(?)からの contribution が、大学の研究所などとはひと味違った at home な研究環境を醸し出しており、どんなタイプの方がみえても、それなりの活動ができるのが当研究部の良いところでもある。

月例会「レーダー気象」の講演募集のお知らせ

標記月例会を下記の通り開催いたします。レーダー気象全般のほか、レーダーで観測される現象のシミュレーションをはじめ関連分野の講演を考えておりますので奮ってご応募ください。

記

日時：1989年11月23日(火)
場所：気象庁

申込方法：題目、講演者氏名、所属と要旨を横書き 400 字詰原稿用紙 1 枚にまとめて提出。

申込先：〒305 茨城県つくば市長峰 1-1

気象研究所台風研究部 榊原 均

Tel. 0298-51-7111 内線 526

講演申込締切日：1989年 8 月 25 日